第三十一回「教育県長崎」振興大会佐世保大会
佐世保市教育会創立一三〇周年記念大会を振り返って

長崎県教育会
理事長　小田恒治

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

本号の特集は昨年の「教育県長崎」振興大会佐世保大会であり、少々時間差が生じたが、お許しいただきたい。

県北の雄、佐世保市における本大会の開催は、九年ぶり四回目である。

本大会は標題のとおり、佐世保市教育会創立一三〇周年記念大会と併せて開催した。当日（十一月九日・土）は、遠路、県副知事　浦真樹様、県議会副議長　吉村洋様、佐世保市長　宮島大典様、県教育長　前川謙介様をはじめ多くの来賓各位の御臨席を賜り、また、佐世保市から、現職の教職員、保護者や退職校長会の方々、さらには子どもの健全育成に心を寄せられる地域の皆様等約五〇〇名にも及ぶ大勢の皆様に参加いただいて、本大会を盛大に開催することができたことは、誠に嬉しく感謝に堪えない。特に、佐世保市教育会の会員構成の特質から、他の大会に比して民生委員の方など地域の皆様の参加が多かったことは特筆すべきであろう。

まず思うのは、標題にも掲げた、佐世保市教育会一三〇年の歩みである。本会も来年創立一四〇周年を迎えるが、いずれも産声をあげたのは明治時代の半ばである。爾来、明治・大正・昭和・平成・令和の五代にわたり、存亡の危機を乗り越えながら、両会を受け継いできた先輩諸氏の涙ぐましい御尽力により、今日の両会があることを噛みしめたい。と同時に、誇りに思う。

大会主題は、「心豊かでたくましく生きる子供の育成のために　今こそ大人社会の再生を進めよう」である。これまでの大会では、主題の眼目はあくまでも「子供」であったが、今回は、最終的には「子供」に目標を置きながら、そのために、まず「大人」の在り方に目を向けるべきではないか、そして大人社会の「再生」から取り組むべきではないか、と視点を変えたところに大きな特質がある。この視点の変更に、「現状を変えなければ」「まず大人が変わらなければ」という当地教育会の並々ならぬ決意を感じる。

副主題は、「地域ぐるみの教育を考える」である。これは本大会の不変の主旨である。学校（教職員）、家庭（保護者）、地域社会の三者が、それぞれの役割と責任を分担し、連携・協働しなければ、今後の教育（子育て）は十分な成果を挙げることができない時代・社会である。まさに「地域ぐるみの教育」「社会総がかりの教育」が求められている。古くて新しいテーマである。

開会に先立つアトラクションでは、江迎中学校生徒の皆さんによる「よさこい乱舞龍」の演舞が行われた。舞台から飛び出しそうな中学生の迫力ある演技に、元気とパワーをもらったのは私一人ではあるまい。大会に花を添えていただいた江迎中の生徒諸君に心から感謝したい。

また、開会行事の中では、例年、善行児童生徒の表彰を行っている。今年も、ボランティア活動や郷土芸能の継承活動など人間愛、郷土愛に溢れた善行が報告された。本会誌に挿入している別紙リーフレットを御覧いただきたい。

今年で九年目になる「私の『夢・憧れ・志』作文コンクール」の最優秀賞（県教育委員会教育長賞）の表彰と、その作文発表も開会行事の中で行った。最優秀賞に輝いた長崎市立淵中学校第二学年の筒井優月さんの作品の書き出しは、「私の将来の夢は、学校の先生になることです。」という明確な決意表明であった。「『先生』という仕事は辛いときもあり、大変な仕事かもしれないけれど、今の私が先生に救われたように、私も子どもたちの味方になって、道を示してあげられるような先生になりたい」という言葉が印象に残る。

本大会の柱である「提言」（シンポジウム）と「記念講演」の詳細については後述に譲るが、「提言」（シンポジウム）に関しては、この数ヶ月間、周到な準備をして臨んでいただいた提言者の四名の皆さん、テーマに沿って時にはユーモアを交えながら絶妙のコーディネートをしていただいた佐世保市の陣内教育長様に深く御礼申し上げる。「何も仕込みなしで型にはまらなかったところが良かった。」「大人の心の安定が子供の心の安定にもつながる」「教育長さんの最後のまとめが素晴らしかった」等の声が数多く聞かれた。結論は出なくても、シンポジストの提案のどこかに共感・共鳴する部分があれば十分である。

さらに、記念講演では、「私の人生を支えた三人の師」という演題で読売新聞特別編集委員の橋本五郎氏に御講演いただいた。特に、高校時代の校長先生の「汝、何のために其処に在りや」という言葉が耳底に残った。感動した。

先日、本大会終了後のアンケートの結果を拝見した。幾つかを紹介する。「まさに大人がスクラムを組んだ意義ある大会だと感じた」「初めて参加しました。もっとお堅いイメージだったのですが、笑いあり涙ありの面白い大会だった」「今日のような会が、他の保護者の方々にも広く知られ、多くの方が来てくだされば、子供への関心、考え方、ＰＴＡなどへの取組などが変わるきっかけになる」「シンポジウムでのそれぞれの立場からの提言は心に刺さった」等々。しかし、大会終了後、会場のエレベーターから出てくる参会者の皆さんの和やかな表情が、大会の成果を何よりも雄弁に物語っていたように思う。

最後になったが、大会を成功させていただいた関係の皆様方に深く感謝する。

祝辞

長崎県知事　大石　賢吾

本日、第三十一回「教育県長崎」振興大会佐世保大会、佐世保市教育会創立百三十周年記念大会が、多くの関係の皆様方ご列席のもと、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

長崎県教育会におかれましては、明治十八年の創立以来、教育の英知を結集した団体として、時代の要請に応じた諸事業を展開され、本県の教育振興に多大なるご貢献をいただいております。改めて深く敬意を表し、感謝申し上げます。

長崎県副知事　浦　真樹氏

さて、本県では、人口減少・少子高齢化が全国よりも早いスピードで進んでおり、それに伴い、労働力不足や地域経済の縮小、地域コミュニティの維持・確保など、様々な課題が顕在化することが懸念されています。一方、九十九島のように美しく豊かな自然、海外と交流し栄えてきた歴史と個性豊かな文化、日本の本土最西端に位置し、アジアに最も近い優位性など、多くのポテンシャルを有しております。

アトラクション「よさこい乱舞龍」
佐世保市立江迎中学校 生徒の皆さん

このような状況にある本県において、更なる発展を図るには、ふるさと長崎県を誇りに思い、将来を担っていく人材を育てることが大変重要なこととなっています。

そのため、県としましては、子供たちへの投資を未来への投資と捉え、本県の将来を担う子供たちが安全・安心に健やかに成長し、その能力と可能性を高めることを積極的に支援し、社会での多様な活躍につなげていきたいと考えております。

善行児童生徒の表彰

そして、教育分野においては、「つながりが創る豊かな教育」を目標に掲げ、第四期長崎県教育振興基本計画による取組を本年度からスタートしたところです。このような中、本大会において、地域ぐるみの教育に焦点を当て、自らの将来に夢や憧れ、志を抱き、「命」を輝かせてたくましく生きる子供、故郷を愛し故郷の発展に寄与する心を持つ子供の育成に取り組んでいただきますことは、大変意義深いことであると存じます。

「夢・憧れ・志」最優秀作文の朗読

ご参会の皆様方におかれましては、「教育県長崎」の更なる発展に向け一層のお力添えを賜りますとともに、本日の成果を各地域において存分に発揮していただきますことをご期待申し上げます。

結びに、本大会のご成功と長崎県教育会及び佐世保市教育会のご発展、並びにご列席の皆様方の今後益々のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げ、お祝いのご挨拶といたします。

秋の叙勲

長年の御功績に対する
栄えある御受章を
心からお祝い申し上げます。

瑞宝双光章

稲富　義人　先生
江頭　明文　先生
菅　節子　先生

◇大会概要

【大会主題】
心豊かでたくましく生きる 子供の育成のために 今こそ 大人社会の再生を進めよう
～地域ぐるみの教育を考える～

去る十一月九日（土）に、三十一回目の「教育県長崎」振興大会が、創立百三十周年を迎えた佐世保市教育会の記念大会と併せて、佐世保市体育文化館コミュニティセンターホールにおいて開催され、約五百名の皆様に御参加いただきました。

開会前のアトラクションとして、佐世保市立江迎中学校の生徒による「よさこい乱舞龍」が披露されました。ステージから溢れんばかりの迫力ある演舞に、会場全体が感動に包まれました。

第Ⅰ部［開会行事］では、小田恒治理事長による開会挨拶の後、県知事代理（副知事）浦 真樹 様、県議会議長代理（副議長）吉村 洋 様、佐世保市長 宮島大典 様に御祝辞をいただきました。続いて、「善行児童生徒」並びに「私の『夢・憧れ・志』作文コンクール」最優秀賞の表彰が行われ、受賞者本人の朗読で作文が披露されました。

第Ⅱ部［提言］では、学校・家庭・地域を代表して四名のシンポジストに登壇いただき、佐世保市教育委員会教育長 陣内康昭 様のコーディネートにより、協議題に沿った貴重な提言並びに意見交換がなされました。

第Ⅲ部［記念講演］では、テレビの報道番組等でお馴染みの読売新聞特別編集委員 橋本五郎 氏をお招きし、「私の人生を支えた三人の師」と題して御講演をいただきました。その様子や概要等については、九ページに掲載しています。

◇提言（シンポジウム）

― 私はこう考える ―
【協議題】
再生させたい 家庭・学校・地域の教育力

今回の［提言］では、「再生」をキーワードに各シンポジストが、ふるさと佐世保の未来を担う子供たちのたくましい成長を願って、それぞれの取組や今後の課題、展望等について熱く語られました。以下が、その概要です。

今 手を出そう、しなやかな関わりで

佐世保市立大塔小学校
校長　酒井　元治

私は校長歴九年目、現任校に赴任する前はブラッセル補習授業校（ベルギー・ブリュッセル）の校長として、三年間海外赴任をしていました。校長になってからは、「学校は大人になるための練習をするところ。社会性を培う場。」という理念の元、学校経営を行っています。

さて、海外赴任を終えた令和四年、三年ぶりに帰国した日本で見たものは、一人で道を歩いている人や一人で車に乗っている人がマスクをしている光景、学校では給食の時間に一言もしゃべることなく食べ物を口に運ぶ子どもたちの異様ともいえる姿でした。同調圧力に弱い日本の風土、型にはまることの好きな体質、「型」から脱却できない長いものに巻かれる気質というものを感じました。さらに、問題であることは「型」にはまることのできない子どもたちを否定する大人の姿勢です。教育での「型」は必要ですが、このままでは、加速するグローバル化に耐えることができないと感じました。

教育や子育ての中で「再生」させるべきものは多々あると思うのですが、時代に合った、そしてグローバル化に耐える形での再生、アプローチの仕方が必要だと思います。

また、私がいなかった三年間で流行言葉のように使われたのが「個別最適、持続可能」。もちろん、持続可能なことは大切なことです。しかし、「来年はできないかもしれないから…」とか「どうせ結果は見えているから…」という理由、持続不可能であることを理由に、今手を出せること、出さなければいけないことに躊躇してはいないだろうかと思います。

私が一番再生させたいのは、教育、子育て、子どもに関わるということの学びとおもしろさ、さらには子どもや子育てに関する寛容性、おおらかさです。

私の学校には素晴らしいサポーターがいらっしゃいます。毎朝子どもたちといっしょに約一㎞の距離を歩いてきてくださる川口さん。時には登校を渋る子を手を引きながら学校まで来てくださいます。銀髪のショートカット、なかなかいかした元ＰＴＡ会長は、この活動を八年間続けてくださっています。六百人を超える大所帯の本校で登校しぶりが少ないのはこの方のおかげです。

また、退職校長の谷口さんは、毎朝ご自宅の前で子どもたちとジャンケンをしてくださる「ジャンケンおじさん」です。わんぱく坊主も、高学年のちょっと背伸びしつつある女の子も、にこにこしながらジャンケンをしています。多くのサポートをいただきながらの学校経営です。

本校では先日運動会を実施しました。四年生になるＡ君は、これまでの運動会では運動場の端っこで泥いじりをしているだけでした。担任と話すと、「なかなか体操服に着替えないで練習にも参加で

きないんです。」ということです。目的は着替えさせることではありません。参加させることです。「着替えんでよかさ。そのまま参加できるものやったらさせてみよう。保護者には着替えのTシャツを持たせるように伝えて。」というアドバスをしました。「何かができないから、次ができない。」ではなく、目的が何かという話です。いいじゃないですか、着替えないくらい。

また、大規模校の本校では、こういった練習にうまく入っていけない子も数人います。私は、全校練習中その子に「校長先生とかけっこの特訓をしようよ。」と声をかけ、開閉会式の練習をしている後ろで、五十ｍを一緒に走ったり、綱引きの練習をしたり、体育館で玉入れの特訓をしたりしました。

誰かがやれば、誰かが見ているんです。本校の二年目、三年目の担任は、不登校気味でこれまで運動会に参加できなかった子に、「係活動だけでもしてみない。」とか「二階の教室から見るだけでもいいから、来てみれば。」と提案をしています。その提案に応じることができればいいのですが、結果が出ないこともあります。でもそれは問題ではないんです。きっと、こういう声をかけられた子は覚えているはずです。

大切なのは、躊躇せず子どもたちに関わること。昔の近所のおじちゃん、おばちゃんは、わんぱく坊主であろうと泣き虫であろうと、おおらかな寛容性を持って声をかけていたと思います。今の日本に必要なのは「しなやかな関わり」だと思います。

家庭と学校の協調性（信頼関係）の再生

佐世保市立宇久中学校
校長　江頭　正次郎

せっかくの機会ですので、はじめに、宇久島と本校の紹介をします。五島列島最北端の離島で、平成十七年度に北松浦郡から佐世保市へ合併し佐世保市宇久町となりました。佐世保駅前の五番街に面した鯨瀬埠頭からフェリーで約三時間半、高速船で一時間半の乗船になります。コバルトブルーの西海国立公園内の大浜海水浴場をはじめ、美しい海に囲まれた自然豊かな島です。その中心部に、本校はあります。以前は、中学校では宇久中学校と神浦中学校がありました。人口減少から現在は統廃合し本校だけになっています。現在の生徒数は、一年生七名、二年生二名、三年生八名の合計十七名です。少人数のため、平成二十年度から宇久小学校、宇久中学校、県立宇久高等学校の小中高一貫教育を実践し「十二年間のキャリア教育」を推進しています。中学校教員が小学校への乗り入れ授業を行い、高校からも乗り入れ授業をしてもらっています。また、一貫教育ならではの小中高合同歓迎遠足、海岸清掃、中高合同体育大会、小中高合同文化祭、駅伝大会、中高百人一首大会などがあり、小中高の校種の垣根を超え、生徒や教職員も顔見知りで家族のような感じになっています。

さて、私からは「失われつつある家庭と学校の協調性（信頼関係）を再生したい」ということを提言します。中学生という思春期真っただ中の子どもたちと対応するなか、様々な生徒指導問題が起こります。当然、本人（生徒）への指導を行った後、保護者へも連絡しますが、その際に現状理解の不足もあり、逆に学校側の対応に不満や苦情、ひいては学校や指導した教職員の責任として追及される場合があります。生徒指導に関する共通理解不足から起こる事象です。

副次的な結果として、教職員が対応に追われて疲弊し、場合によっては病休へと至り、また、代替教員の不足から、職場でのマンパワーが欠落し、教師のなり手不足にもつながり悪循環になっています。

昔は私もそうでしたが学校から連絡があると、「学校の先生から連絡のあったぞ。なんかしたろ、先生や人に迷惑かくんな」と家庭でも親からゲンコツをもらい、しかられた時代に育ちました。今だからこそ、学校と家庭との協調性（信頼関係）を再生し、互いに子育てをしていく環境が必要だと思います。

信頼関係を構築する手立てとして、以前お世話になった先輩校長先生から、指導の連絡ばかりではなく、生徒が頑張ったときも連絡したり、指導後に「ご家庭では、その後どうでしょうか」というフォローや気がけたりすることが重要だと学び、実践をしているところです。

次に「夢や希望をもった子どもたちを育てる」ことの必要性を提言します。

高校進学の面接練習でのよくある光景で、「将来の夢や就きたい職業」を質問すると、しばらく考え「ありません」と答える生徒が多くいます。よく聞いていくと受験する高校を選んだ理由がはっきりとしていません。「親が言うから」「友達がそこを受験するから」「受かりやすいから?」と本当に自分の意思で受けようとしているのかという場面に遭遇します。自分の将来像が描けていない。家庭で自分（生徒）の将来を思い語る時間や場面があるのでしょうか?また、せっかく苦労して合格した高校や就職先を一か月も立たずに辞めてしまう若者が多くいます。なぜだろうか?目標がない。目標に向かって努力できない。新たな環境に馴染むことができない。人間関係が構築できない。コミュニケーションがうまく取れない。我慢強く対応できない。等々。目標があればマイナス思考ではなく、プラス思考で取り組むことができるのでは。最初からできる人はいない。努力することで未来が拓けることを伝える必要がある。「夢や希望をもった子ども」

を育てることが、社会の再生にもつながるのではと思います。

再生させたい家庭・地域

佐世保市立福石中学校ＰＴＡ
会長　池田　弥生

「おはよう」私の一日は、この言葉から始まります。起きてすぐ自分自身に「おはよう」と声をかけて、今日も元気に目覚めた！ありがとう！と気持ちを込めて言うようにしています。

子どもたちからは、「お母さんは朝からテンション高い、うざい」と言われますが、私からしたら、その態度、言葉の方が…と思いつつ口にはしません。その場で喧嘩になってしまうし、きっと私も親にそのような態度をとっていたと思うからです。

皆さんは、朝、「おはよう」と言っていますか。当たり前と思われるかもしれませんが、今、その「おはよう」が言えない保護者、大人が増えていると思います。保護者が言わない、よって子どもも言わない、言えない。挨拶が出来ない大人が増えている中で、子どもが挨拶できると思いますか。

私は、大人が挨拶してる姿を見て育ちました。強要されてしても、その場だけで持続しない。自然と身についたことは持続するんです。私は、子どもたちに「挨拶しなさい」と言ったことはありません。親から教わったように背中を見せています。

また、ひと昔前と違い、「無関心」の大人が増えていると思います。保護者は地域（町内会、子ども会）、学校に対しても無関心、もっと言うと我が子に対しても無関心。ＰＴＡとか尚更です。無関心って、ストレスが溜まらないし、何も考えなくてよいし、楽なんです。

だけど、無関心の保護者、大人が増えることで、子どもが被害、犯罪に巻き込まれたりしていると思います。保護者が、大人が、親身に子どもたちとコミュニケーションをとれていたら、未成年の犯罪は減ると思います。

私の家の前は、通学路になっています。登下校の際は、外に出て、子どもたちに声をかけるようにしています。数年前、いつも一人でポツポツ歩いて登下校している男の子がいました。挨拶しても無反応。でも、毎日、毎日、声をかけていました。その子が気になり、でも踏み込み過ぎるのもいけないと思いつつ、我慢できず話しかけました。その中で、親から「おはよう」と言われたことがない。だから、何て言って良いか分からなかった。最近は親と喧嘩して話もしていない、話したいと、寂しそうに言ったんです。私は毎日、ここに居るから話しにおいで、と言ったら、下校時、自分から「ただいまー」と言ってくれるようになり、たわいもない話もするようになり、笑顔も増えてきました。卒業式には、卒業証書を見せに来てくれ、高校に入学してからは、制服を見せに来て、近況を話してくれました。

現代社会では、ネット弊害が問題視されていますが、私は、ネットを活用し、今でも交流を図っています。子どもたちの中には、無関心の大人が多い分、寂しい思いをしている子も居ると思います。大人と話したいのです。大人の話を聞きたいのです。大人の温もりを感じたいのです。

ＰＴＡに携わり、保護者の皆さんと関わる中で、ＰＴＡに対する愚痴ばかり。そこで私は、そうした愚痴や不満を新しく変わるきっかけにしたいと考え、組織のあり方を変えました。

専門部数を五つから三つに減らし、役員数、役員会等も減らしました。加えて、クラス単位で行っていた役員選出を学年単位に変えました。そうすることで、年度内に次の役員が決まり、先生方の負担も軽減され、新年度と共に新体制で挑むことができました。

また、新旧の引継ぎをすると、させられてる感が出るので、新役員だけで話し合い、その年の色を出してもらうようにしました。何よりも、ＰＴＡ活動は、保護者の交流の場、息抜きの場であってよいと思うので、不満の種になってることを無くし、動きやすい組織づくりに努めています。

子どもに限らず、保護者も誰かと話したいのです。保護者や大人が笑顔でいると、子どもは嬉しいのです。大人が楽しんでる姿を見るのも楽しいのです。笑顔でいると、自分自身も周りも明るくなります。家庭で笑顔でいると子どもの心は落ち着きます。ぜひ、子どもの生の声に耳を傾け、大人の温かい声を聞かせてください。

私は、これまでの経験から、地域やＰＴＡの活動に携わることは、家庭の再生にもつながると思います。地域では優しく見守り、学校では道標を指してもらいながら、子どもに寄り添い育てていくことが大切だと思います。

子どもが冒険できる おおらかな社会を再生させたい

県立佐世保青少年の天地
所長　山口　政則

佐世保青少年の天地は「自然の家」として多くの子どもたちが利用し、自然の中での生活を体験する施設です。しかし、水道、電気、ガスなどのライフラインはもちろん冷暖房や自動販売機などもあり、本来の何も備わっていない不便な自然とは大きくかけ離れています。そのような中で自然散策や野外炊飯、フィールドワーク、クラフト活動等、いわゆる普

段の生活ではできない自然体験活動を仕組んでいます。

㈠　大人が臆病になっている

引率している方からよく聞かれることが、「子どもたちだけで山の中を歩かせて大丈夫ですか」「野外炊飯はやけどしませんか」「ナイフを使うのは危ないでしょう」などです。施設では事故やけががないように十分配慮し指導を行っていますが、体験させる前に大人がストップをかけてしまい、せっかくの子どもたちの貴重な体験の機会を奪っているようでなりません。

これは、何かあった時の責任問題にもなりかねないのでやむを得ないことかもしれません。熱中症を恐れるばかりに、ちょっと暑いと屋外での活動は中止。児童が二段ベッドから落下した事故を聞くと、ベッド上段の使用は禁止。また、のどに詰まらせたという事故があったウズラの卵は、今では給食に出されることはなくなったとも聞きます。

ほんの一例が万事としてとらえられるようになっています。万に一つに備えることはもちろん大切です。しかし万に一つを恐れるばかりに大人たちはあまりにも臆病になっているような気がしてなりません。

㈡　大人の都合で子どもの育ちを阻害している

私の少年時代は地域のおじちゃん・おばちゃん、青年団などの大人が何かにつけ子どもたちに関わってくれていました。休業日にはキャンプやハイキング、魚釣りなどに何度も連れていってもらい、ずいぶん楽しかったことを覚えています。

しかし、今ではそういう子ども会やＰＴＡ、学級でといった任意団体での利用はほとんどありません。

大人自身に余裕がないのか、面倒くさいのか、あるいは万が一を恐れた責任回避なのかはわかりませんが、そんな子供たちの体験の機会が失われてきています。

㈢　地域社会との関わりを持とうとしない大人たち

岡山県では県ＰＴＡ連合会そのものが解散されたそうです。ＰＴＡそのものの果たす役割や活動の意義は大きく、その恩恵も十分受けていたはずなのに、解散に至っては九割以上の賛同があったというから驚きです。

私の町内会でも、以前は毎年夏祭りが開催され多くの子どもたちでにぎわっていましたが、コロナ禍で中止となったまま今では開催されておらず、復活の声さえ上がってきません。まずは大人同士のかかわりを再構築し、組織として子どもの教育に関わる体制づくりが大切だと思います。

㈣　子どもだけで活動する場を

信じられない犯罪や事故が多発する中、「子どもだけで」は、もはや通用しない社会になっています。

私たちの子どもの頃は、六年生の兄ちゃん・姉ちゃんに連れられ朝だけは集団登校でしたが、下校はそうではありませんでした。登校するたびに学校帰りはどこに寄り道して帰るか友達と作戦会議。あそこの川に鮎が上ってきた、あの山に栗がなっている、あそこの田んぼに藁が積んである。学校帰りはまさに心が躍る冒険の世界でした。

しかし、今では常に大人の監視下で子どもたちは生活しています。塾や習い事、買い物、遊びにも常に親が付き添い、スマホのＧＰＳ機能を使って子どもの居場所を常に確認している親も少なくありません。

いつも親の目を避けて遊んでいた私にとっては、息が詰まって仕方がなかったと思います。

そうかと言って、このような社会を否定するつもりは毛頭ありません。大人が子どもを見守ることは、もはや必然の世の中になっています。

そんな社会の中にあっても、子どもたちが大人の目を気にすることなく伸び伸びできる遊びの場、学びの場さらには冒険の場をつくってあげられないものか、今こそ私たち大人が知恵を絞る時だと思います。

シンポジウムのまとめ

佐世保市教育委員会
教育長　陣内　康昭

県教育会の皆様には九年ぶりに開催された本大会において多くの示唆をいただきましたこと、併せて市教育会の皆様には百三十年の長きに亘って本市教育を支えていただいておりますことに感謝申し上げます。

「再生させたい家庭・学校・地域の教育力」という本大会のテーマには、「衰え、または失いかけている教育を何とか復活させたい」という切実な願いと強い決意を感じました。

提言者の皆さんからは、再生させたい教育力として、①「学校と保護者との信頼関係」②「子育て・教育に対する関心（当事者意識）」③「価値ある子育て・教

育活動」④「子育て・教育活動の学びと面白さの実感」が挙げられました。

「我が子にさえ関心がもてないならば学校や社会に対しては尚更に無関心となる。無関心から信頼関係は生まれない。信頼関係のなさが教育活動を形骸化させ、子どもたちを冒険させたり任せたりする豊かな活動の実施が躊躇される。こんなスパイラルが子育て・教育の本質を失わせようとしている」とも考えられます。

嘆いている暇も余裕もない今、再生のために動き始めなければなりません。

シンポジストや会場の皆さんからは、①「スマホでつながる」や「前例にとらわれない（引継ぎをしない）ＰＴＡ活動」等のアイディア、②地域の大人の連動、③型にはまらない「自発的な活動」、④核家族をはじめとした家庭の在り方、⑤認め合い感謝し合う中での教育エネルギーの再生、⑥子どもたちが自分の将来を夢見る活動の重要性等、具体的な活動の決意が活発に交わされました。

関心が信頼を生み、信頼が子育て・教育活動を充実させ、活動の充実が子育て教育の本質を高めるという「正のスパイラル」の再生を求める姿に、改めて教育会が耕してこられた教育土壌の豊かさを実感できました。

我が国の多くの十八歳の若者は、自分を大人ではないと考えているといいます。「怪我をしそうな活動はさせない」「考えさせる前に効率的なやり方を教える」「子どもが困ることがあったら大人が原因を除去する」といった、教師・親・地域社会が必要以上に子どもを丁寧に扱い過ぎたことも少なからず影響していると思われます。

教育の営みは、子どもの今日の笑顔のためでもあり、将来の笑顔のためでもあります。子どもたちが、豊かな人生を切り拓きながら社会の成員として輝く姿を想像することが、教育再生の第一歩かもしれません。

大会を振り返って

佐世保大会実行委員長
（佐世保市教育会　会長）
古賀　良一

地球規模で起きる様々な事件や争い事、世界中の国々の経済も政治も乱れ、人の道はどこに行ったのでしょうか。今まさに一体この先どうなるのかという世相不安の時代です。それは私たちが過去の歴史からの「学び」を忘れ、大人社会・地域社会が「教育」という二文字をなおざりにしたからだと思うのです。

こんな難しい時代、九年ぶりの振興大会佐世保大会、加えて佐世保市教育会創立百三十周年の節目の年にあたり、県教育会のご配慮でその冠もつけさせていただき実行委員会が立ち上がりました。「夢・憧れ・志にあふれる心身ともにたくましい子供の育成」は是非続けたいが、先ずはこういう時代だからこそ、夢・憧れ・志があふれる大人社会だったか地域社会であったかを猛省し、先ずは範になる大人社会になるべきであると「心豊かでたくましく生きる子供の育成のために今こそ大人社会の再生を進めよう」を大会主題に、「地域ぐるみの教育を考える」を副主題に掲げ、地域ぐるみ・社会総ぐるみの教育を今一度考え直そうという視点で大会に臨むこととしました。

開会前のアトラクションは、我々のもやもやを吹き飛ばしてくれるような夢一杯・元気一杯の江迎中生徒による「よさこい乱舞龍」の演舞が披露されました。第一部開会行事では県副知事様、県議会副議長様を始め多数のご来賓をお迎えし厳粛な中にも温かい励ましのお言葉を頂きました。恒例の善行表彰・作文コンクール表彰、最優秀賞を受賞された長崎市立淵中学校の筒井優月さんの作文朗読。お世話になった先生との出会いから自分自身も学校の先生になりたいと発表され、まさに夢・憧れ・志の話だったと感激しました。また、善行表彰を受けた児童生徒の皆さんの行動が大変心強く感動したことでした。

第二部では陣内教育長をコーディネーターにシンポジウムが行われました。小・中学校長、ＰＴＡ会長、地域代表として、それぞれの立場で現場の現状や変わり様などの課題をご提言頂きました。どうすればどう変わるのか、和やかな雰囲気の中に話が進み、会場からのご意見もあり、たくさんの再生に向けてのヒント、特に親が、地域が、世の中全てが「無関心」になっているのではないかというご指摘も頂きました。第三部は橋本五郎氏に「私の人生を支えた三人の師」の演題でご講演いただきました。様々な活動の中に多くのご縁と師と慕う出会いがあること等、涙腺の緩む講演でありました。

この大会を通して様々なヒントと気付きを得ることができました。この学びを行動に変えることが大会主題に迫ることになるのではと考えています。皆様方のご支援・ご協力で「教育県長崎」振興大会佐世保大会を無事盛会裏に終了することができました。実行委員・協力員の先生方、市教育会の役員・支部長・会員の皆様方にお労いと感謝を申し上げ報告といたします。

記念講演

私の人生を支えた三人の師

講師　読売新聞特別編集委員　橋本　五郎　氏

今回の記念講演では、読売新聞で論説委員、政治部長、編集委員を歴任され、多くのテレビ番組でキャスターとして活躍されている、読売新聞特別編集委員の橋本五郎氏を講師にお招きしました。

演題にもなっている、橋本五郎氏を支えた「三人の師」や、確固たる信念に支えられた政治記者としてのご経験を、時に熱く、時に涙ながらに語られる姿に、来場者全員が引き付けられた講演でした。

ここでは、貴重なお話の概要と、参加者の感想をいくつか紹介します。

【講演の概要】

Ⅰ　一人目の「師」

一人目の「師」は、秋田高校時代の校長の鈴木健次郎先生である。赴任された時に先生が厳粛な佇まいで問われた、「汝、何のためにそこに在りや」という言葉。この問いはずっと今もなお、自分に対して突きつけられてる。

また、先生の「教育とは、青少年の足を洗うことである」という言葉。この言葉には、教育とは高みからではなくて同じ目線で相手が何を思っているのかということを考えながら行わなければならない、という意味があると解釈している。

Ⅱ　二人目の「師」

二人目の「師」は、胃癌を患った時の主治医である大山廉平先生である。大山先生の適切な治療を受けながら、先生を「信頼」することがいかに大切であるかを学ぶことができた。

また、医療スタッフやボランティアの方々の献身的な姿勢に感銘を受け、退院後の生活や、記者としての仕事に対する考え方が大きく変わるきっかけとなる貴重な経験であった。

Ⅲ　三人目の「師」

三人目の「師」は母親である。母親は、本当に苦労して家族を支えてくれた。その母親から、就職の時に言われたのが、次の三つの言葉である。

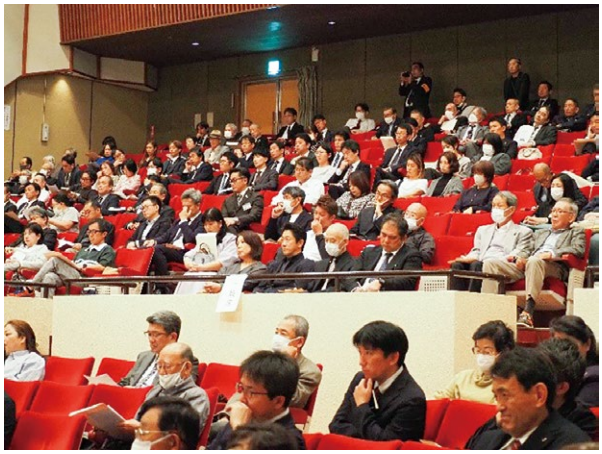
一、「何事にも手を抜いてはならない。常に全力で当たること」

二、「傲慢になってはいけない。常に謙虚であれ」

三、「どんな人でも嫌いになることはない。嫌だなぁと思ったら、その人の中に自分よりも優れているものがあるかどうかを見よ」

母親にそう言われてから五十四年が過ぎたが、一日として忘れたことはない。自分はちゃんとこの教えを守っているのか。お天道様が見ている、という言葉がある。私にとって母親はお天道様であり、恥ずかしいことはできない。自分は政治記者であるから、私を捨てて公のために尽くしているかどうか、自らに問うべきだ、と常々思っている。

この他にも、政治記者として交流のあった政治家の方々との様々なエピソードや、教育・教師に対する熱く、温かい思いも語っていただきました。橋本先生、ご多用の中、本当にありがとうございました。



【参加者の感想】

○「汝、何のためにそこに在りや」という言葉が響きました。今を大切に生きていきたいと思います。

○内容はもちろん、橋本五郎さんの伝える言葉の力強さに感動しました。

○今回の講演で「人の気持ちがわからなければ教育はできない」という思いを強くできました。

○母親として大切なこと、親として大切なことを再確認できました。

○様々な言葉が、胸を打ちました。今後の生きる指針とします。